

第49回神戸女学院大学英語英文学会 (KCSES) 大会報告

国際学部長 白井 由美子

長く続いた暑い夏もひと段落し、秋の深まりを感じられるようになった11月1日に、第49回神戸女学院大学英語英文学会 (KCSES) が開催された。この学会は、英文学科卒業生・大学院生・大学院修了生の研究発展および在学生の向学意欲の向上を目的として大学院設置の際に設けられた伝統ある英文学科ならではの学会である。2024年4月に文学部英文学科が国際学部英語学科とグローバル・スタディーズ学科として新たな船出をしたことに伴い、学会の名称変更も検討したが、この学会の持つ意味を考え、今までと同じ名称で49回目の大会を開催することにした。KCSESは毎年卒業生、教職員の想いのこもった学会であるが、今回はそれに新しさが加わった大会になったと言える。学会発表の内容も古きよきものと新しい風が参加者に刺激を与えてくれる濃いものであった。構成は、前半が卒業生による研究発表、後半が特別講演。今回は英米文学文化分野が担当で、オーストラリアやニュージーランドの文学をご専門とする大阪大学大学院人文学研究科教授の小杉世先生を特別講師としてお招きすることになった。嬉しいことに、小杉先生も本学の卒業生でいらっしゃる、今大会は発表者全員が文学部英文学科の卒業生となった。

小杉先生は『帝国のホモ・サケル——太平洋核実験をめぐる芸術の想像力と抵抗・レジリエンスの詩学』と題してお話し下さった。文学、舞台芸術、核実験、と盛りだくさんの内容で、聴く者が精神の揺さぶりや想像力が訓練されるように感じた。文学や舞台で新しく活躍する方々を紹介して頂けたことも収穫であった。

前半の研究発表の部では、まず西川美咲氏による『TBLTを意識したPPPベースの指導—日本の中学

校3年生での文法授業実践—』を聴いた。実際に現在西川氏が教える中学校3年生の授業を通しての発見や工夫から教室でのアクティブな学びの様子を知ることが出来た。続いて藤原知予氏による『書簡翻訳について再発見する作家の姿：D.H. ロレンス研究会における文学翻訳活動の歩み』と題した発表を聴いた。学会での丁寧な取り組みから見えてきた興味深い事柄に触れる機会であった。

今回もオンライン開催となり画面越しではあったが、発表者、聴衆が一つとなって、気持ちのこもった意義深い学会となった。この学会のためにご協力下さった会員の皆様、教職員、コミュニティの皆様に深く感謝申し上げますと共に、皆さまのさらなるご活躍をお祈り申し上げます。

第49回
神戸女学院大学英語英文学会

《開催日時》
2024年11月1日 金
14:00~16:30
《開催方法》
オンライン (Zoom)

----- プログラム -----

I. 研究発表
「TBLTを意識したPPPベースの指導」
日本の中学校3年生での文法授業実践」
西川 美咲氏 (清教学園中・高等学校 常勤講師)

「書簡翻訳にて再発見する作家の姿」
D.H.ロレンス研究会における文学翻訳活動の歩み」
藤原 知予氏 (大阪産業大学 国際学部 国際学科 准教授)

II. 特別講演
「帝国のホモ・サケル
——太平洋核実験をめぐる芸術の想像力と抵抗・レジリエンスの詩学」
小杉 世氏 (大阪大学大学院人文学研究科 教授)

【お問合せ】
神戸女学院大学国際学部/文学部英文学科事務局 e-mail: c.office@mail.kobec.ac.jp

特別講演

帝国のホモ・サケル—— 太平洋核実験をめぐる芸術の 想像力と抵抗・レジリエンスの詩学

小杉 世

(大阪大学大学院人文学研究科 言語文化学専攻 教授)

はじめに—人文学に何ができるか

ウクライナでの戦争、ガザの空爆、紛争がたえないこの世界において、人の語る言葉がどんな力をもつのか、人文学に何ができるのか、芸術や文学のもつ社会的な機能とは何か、そんなことを考えている。『現代詩手帖』5月号の特集「パレスチナ詩アンソロジー」の冒頭におさめられ、10月のNHKスペシャルでもとりあげられたガザの詩人リファト・アルアライールの詩「If I must die」にふれた方は多いのではないだろうか。空爆で亡くなったリファトの遺書ともいえるこの詩で、詩人は「わたしが死ななければならないのなら／あなたは、生きなくてはならない／わたしの物語を語」るためにと呼びかけている。この詩がSNSで世界の多くの人たちに共有され、生きる力や希望をもたらしたことは、人の言葉がもつ力の大きさを物語る出来事であった。この講演でもそんな芸術のもつ力について考えてみたい。

帝国のホモ・サケル

ロブ・ニクソンは放射能汚染や気候変動など「遅い暴力(slow violence)」と呼ぶゆっくりと侵食する力の影響を最も受けやすいのは、かつて帝国主義や植民地支配を経験し、グローバル資本主義の下で搾取されてきた先住民や移民労働者、難民などの人々であると指摘する(Nixon 2011)。この目に見えない暴力を可視化する役割を芸術や文学が果たしてきた。ガヤトリ・C・スピヴァクは、芸術や人文学による「美的教育(aesthetic education)」を「想像力の訓練による欲望の再配置」(Spivak 2012:125)と呼ぶ。芸術や文学は、「他者」の体験のなかに入り込み、何らかの変化を受ける体験である。芸術は当事者と非当事者が出会う場であり、スピヴァクによれば、「想像力の訓練」は、人間の欲望そのものを変える力をもつ(Spivak 2012:131)。また、ディペッシュ・チャクラバルティは、人間の

活動が地球の環境に大きな影響を及ぼす人新世の時代において、惑星の存続には「人間中心の視点」から「生命中心の視点」への転換が必要であると主張する(Chakrabarty 2015)。ここでいう「生命」とは、人間の社会的な生を意味する「ビオス」に対して、あらゆる種の生に共通した単に生きている状態を意味する「ゾーエー」であり、ジョルジョ・アガンベンが『ホモ・サケル—主権権力と剥き出しの生』のなかで「名をもたない剥き出しの生」(アガンベン 2007:172)と呼ぶのもこの「ゾーエー」である。共同体から締め出され法の外におかれて「殺害可能」とされた存在をアガンベンはホモ・サケルと呼ぶ。核実験の被害者は、兵士も民間人も、この「剥き出しの生」を生きるホモ・サケル、国家の平安、世界の平安を守るという大義をにかけて、帝国が犠牲にしてもよいとみなした存在であった(アガンベン 2007)。帝国の太平洋核実験の舞台となったオセアニアの芸術には、そのような「帝国のホモ・サケル」と呼ぶべき存在がしばしば表象される。

ガラスのヤムイモとアボリジナルの苦難の歴史

オーストラリア南部のアボリジナルのコミュニティに出自をもつガラス・アーティスト、イワニ・スケース(Yhonnie Scarce)は、マラリング砂漠での核実験で被ばくした親族をもつ。首を吊られた黒いヤムイモ型のガラス細工やアクリル製の棺に詰められたヤムイモ型のガラス細工によって、スケースは植民地化の過程において虐殺の対象となったアボリジナルの苦難の歴史を表象し、植民地主義の暴力を批判する。スケースの『雷が降らせる毒(原題:Thunder Raining Poison)』は、植民地化の暴力のひとつとしての核実験をテーマとした作品であり、天井から吊るされた2000個のヤムイモ型の緑がかった半透明のガラス細工からなるキノコ雲は、砂漠の砂が熱で溶けて放射性の鉱石トリニタイトになる瞬間をとらえている。ガラスのヤムイモは核実験で先祖の土地が汚染され不毛となったことを示すが、同時にスケースはガラスの「強固さ」にアボリジナルのレジリエンスを見る(Human Rights in Australia 2013)。アボリジナルが根差す土地の「砂」から生まれ、アーティストの息によって形と生命を与えられたスケースのガラス造形芸術は、アボリジナルの集合的な記憶の結晶化であり、「見えない」犠牲者たちに形を与え

て、歴史に沈黙させられた声なき存在の表象を試みている。

レミ・ポニファシオの舞台芸術における核の表象

ニュージーランド在住のサモア人舞台芸術家レミ・ポニファシオの舞台芸術においても、核の表象はしばしば現れる。日本に10年ほど在住経験があり、日本の舞踏にもふれたポニファシオの作品に、舞踏の影響をみる西洋の批評家もあるが、ポニファシオの作品のなかで次第に抽象化しながらも繰り返される核の表象の根底にあるのは、かつて太平洋で行われた核実験という植民地主義の暴力に対するオセアニア人としての「当事者性」であろう。ポニファシオの核表象を、キリバス共和国クリスマス島の核実験についてのインタビューとの関連において、表象世界と現実世界を私自身の想像力でつなぎながら論じた。

『クリムソン・ハウス』の終盤近くでは、トランスジェンダーのダンサーが大きなテーブル台の上に裸体でうつ伏せに横たわり、ゆっくりと水を掻く動作をする。滴る水の音、その静寂を破る爆発音が何回も鳴り響く。人間の生まれる前の原初的な空間を思わせる場面で繰り返されるこの脅威的な音は、胎児が外界の暴力を感じる様子を連想させる。筆者はクリスマス島でインタビューを行ったとき、核実験の当日に産気づき、実験が終わったあと、船から病院に直接運ばれて出産したというクリスマス島在住のキリバス人女性から、胎児の目に現れた白点の話を聞いた。マーシャル諸島、ジョンストン島、キリバスのモールデン島とクリスマス島、大気圏核実験が禁止されたあとも続いた仏領ポリネシアの海底核実験、繰り返される爆発音は海のなかでどんなふうに響いたのだろうか。子宮のなかの胎児に意識や記憶があったら、母親が船底で聞いた爆音や揺れは、上記の場面のよう聞こえたかもしれない。

ポニファシオの舞台芸術の抽象性は観客の想像力を必要とするが、舞台空間を観客と共有するなかで、観客の意識が変わること、それが重要なのだとポニファシオは述べる。

短編映画『へそと原爆』(1960)

ポニファシオの舞台芸術とは直接の影響関係はないが、太平洋で核実験が行われていた時期に制作され、日本の舞踏家・土方巽が出演した短編映

画『へそと原爆』(監督:細江英公、1960年制作)には、核のテクノロジーの批判が暗示的に描かれる。ラストシーンの明るい砂浜に転がるリンゴは核の平和利用(原発開発)の象徴だろうか。この映画には、第五福竜丸事件の翌年に封切られた黒沢明監督の『生きものの記録』(1955)に描かれる冷戦期の核実験の放射性降下物の谷間に生きる恐怖と狂気とは裏腹の明るさがあり、核の平和利用と戦後の経済成長へと向かう時代性を反映しているものと思われる。

キャシー・ジェットニル=キジナーの詩「環礁と身体」

マーシャル諸島マジュロに生まれ、ハワイで教育を受けたキャシー・ジェットニル=キジナー(Kathy Jetñil-Kijiner)は、核軍事化の負の遺産を家族や親族に受け継いでいる若い世代のマーシャル人としての当事者性を詩で表明している。カヌーでエニウェトク環礁を訪れ、ルニットドームの上で朗読した詩のパフォーマンス映像「受膏者(Anointed)」では、核実験場となってその「腹」をえぐられ、放射性物質のゴミを埋めてコンクリートで固めた「墓」となった島の変容(受難)の痛みを、人間の身体になぞらえて想像し、「おまえのもとに行こう、おまえをどのように思い出せばよいのか」と島の「遺体」に呼びかける。環礁の受難の歴史を自らの身体記憶として引き受ける詩人は、そこから新たな言葉を紡ごうとする。

おわりに

講演を聴いてくださった方々からのコメントにもあったが、ジェノサイドともいえるような現代の世界で現実には起こっている紛争の状況と、帝国主義や植民地主義の歴史のなかで生じた先住民などの置かれた状況は、つながっている。文学や芸術は想像力によって当事者と非当事者の出会う場をつくり人びとの意識を変容させる社会的機能を持つ。2005年の在外研究時に関心を持ち始めたキリバス共和国クリスマス島での核実験の記憶に関する調査を後に行うことになったのは、2011年の東日本大震災と福島原発事故によって太平洋と日本の核の問題を考えるようになったこと、2012年3月に、ポニファシオがオークランドのマラエ(マオリの伝統的集会場)で行っていたワークショップでの、キリバス人のダンサーたちとの対面での出会いとその後の作品との出会いがきっかけであっ

た。ポニファシオの創作原理は、芸術を通して「精神の革命」をもたらすことだが、舞台芸術やその制作に関わる生身の人間の存在との出会いが、人の意識を変えることは、私個人の研究の遍歴からも証明されているといえるかもしれない。最後に母校でもある神戸女学院大学で講演の機会をいただいたこと感謝したい。

(＊この講演の内容は2024年12月発行の共著の第9章の内容に一部基づいている。)

発表要旨①

TBLTを意識したPPPベースの指導 — 日本の中学校3年生での 文法授業実践 —

西川 美咲

(清教学園中・高等学校 英語科)

2014年3月に文学部英文学科を卒業し、早いもので10年が経ちました。その後、大阪教育大学大学院教育学研究科に進学、2年間、英語授業と自尊心をテーマに研究し、修了後から教壇に立ちましたので、現在は教員9年目です。2024年4月から、大阪府河内長野市にあります清教学園中・高等学校にて勤務しております。神戸女学院と同じキリスト教・プロテスタントの学校という共通点はもちろんあるのですが、岡田山よりもさらに厳しい(?)『しらかしの径』を「登って」通勤しております。

2016年のKCSSESでも修士論文のテーマで発表させて頂きましたが、またこうして、現場での私の授業実践の発表の機会を頂きましたこと、感謝申し上げます。今回は私が中学3年生に対して行っている文法授業の内容を、昨今、英語教育の分野で広く注目され支持されているTBLT (Task-Based Language Teaching) の発想を踏まえながら、従来型PPP (Presentation-Practice-Production) をベースにした、より日本人英語学習者向けの実践を通して紹介しました。

PPPは一般的に広く採用されている指導法で、日本の英語学習環境との整合性が高く、英語科教員にとっても指導しやすく、指導法そのものが確立

されています。一方、TBLTは、形式に焦点をあてた明示的文法指導は基本的に行わないことが前提とされ、さらにPPPとは文法指導のタイミングが異なると言われています。アウトプット仮説や交流仮説が提唱されてから、コミュニケーションを図りながら言語を自然に身につけていくことが理想とされているCLT/TBLTが世間的には大流行していますが、日本にEFLでの学習環境下には合わない、とまではいかなくても実際の授業に落とし込むには工夫が必要と考えています。そこで、従来のPPP指導で指摘されていた 1) インプット量の不足 2) 機械的練習の過度な依存 3) 言語の機能を学ぶ場の欠如 を出来る限り改善を試みた改定型PPP (佐藤, 2022) を実践しました。改定型PPPでは、1) Presentation段階では教師のモデルトークによるインプットと生徒とのインタラクションの機会を確保し、2) Practice段階では、文脈を伴った各個人に関連のある英文を用いての形式と意味に焦点を当てた練習、最後の3) Productionでは、必ずしも目標文法を義務付けない自由度の高い活動で、コミュニケーション能力の育成を図るものです。今回の単元は仮定法過去・仮定法過去完了です。1) 段階では、この仮定法の授業に入る直前まで行っていたオーストラリアグローバル研修を話題に、既習事項を用いてi+1を意識して会話、2) 段階では、Ifすごろくを通して質問に答えながら、繰り返し練習、そして3) 段階では仮定法過去完了とも合わせて、「次年度研修に参加する後輩たちにアドバイス」をヒントに、英文を作る・発表する課題に取り組みました。

このKCSSESの発表に向けてという意味で、短い実践にはなりましたが、生徒たちはどの授業・活動にも真剣に取り組んでいました。中学3年生に仮定法過去完了を扱うのは、内容が難しく苦劳しましたが、改訂版PPPを踏まえ、工夫することで十分可能と考えました。

発表要旨②

書簡翻訳にて再発見する作家の姿： D. H. ロレンス研究会における 文学翻訳活動の歩み

藤原 知予

(大阪産業大学国際学部 准教授)

英語でしたためられた作家の書簡を、日本語に翻訳して世の中に出す、ということに、一体どのような意義があるのだろうか。そもそも、作家と作品とを切り離すべきだと考えることも多い文学研究において、作家の残した書簡を読むことが、作品研究にどのような意味をもたらすのだろうか。この二つの問題は、それぞれが大きなテーマであるため、本来別で議論すべきものであろう。しかし、発表者が所属しているD. H. ロレンス研究会においては、この二つの問題意識を結びつけて翻訳研究活動をスタートさせた。つまり、ロレンスのエッセイや書簡の翻訳活動は、ロレンスの研究論文を書く上で、彼の思想をより深く理解するため、自分たちが勉強するために始めたものなのである。

本発表では、D. H. ロレンス研究会における文学翻訳と、編集や校正など出版に関する活動について報告し、さらに、作家の書簡を翻訳する仕事、本研究会では文学研究の原点に位置する活動であることを紹介する。京都に拠点を置くD. H. ロレンス研究会において2005年から出版し始めた『D. H. ロレンス書簡集』は、現在全X巻が出版されている。この活動は、底本であるケンブリッジ大学出版局版『D. H. ロレンス書簡集』全VIII巻を全訳するという試みであり、現在わたしたちの邦訳版は、ケンブリッジ版の第IV巻の四分の一ほどの箇所によりやく到達したところだ。各巻二十人前後の会員で原則一年ごとのロレンスの書簡を分担して翻訳し、研究会に素訳原稿を持ち寄って、それぞれの訳を検討し、練り直していく共同研究の形を取っているのも特徴だ。このロレンス研究会における書簡集の翻訳・編集作業を含む共同研究を、一事例として報告する。さらに、発表者が編集委員として携わった第IX巻(2019年出版)と、今年三月に出版された最新の第X巻を取り上げ、作品や伝記を読むだけでは浮かび上がらないであろう作家の一面に光を当て、再発見できる手段として、書簡翻

訳という研究活動の意義を論じてみたい。

国際学会発表(会員氏名ABC順)

*立石 浩一 氏

“How Do Humans Evaluate AI-made Haiku Poems?”

台湾、National Taiwan Universityで開催されたThe 11th Conference on Language, Discourse and Cognition (2024年5月3-4日)におけるポスター発表。

“Are We Biased against AI-made Haiku Poems?”

アメリカ、Marriott Philadelphia Downtownで開催されたThe 101st Annual Meeting of the Linguistic Society of America (2025年1月9-12日)、The 5 Minute Linguist セッションにおける研究発表。

“Prosodic Boundary Processing is Language-dependent.”

アメリカ、Marriott Philadelphia Downtownで開催されたThe 101st Annual Meeting of the Linguistic Society of America (2025年1月9-12日)におけるポスター発表。

*吉田 純子 氏

“When Adults Read Children’s Literature: Angela Johnson’s a cool moonlight and the Ethics of Care,”

台湾、東呉大学(Soochow University)で開催されたTaiwan Children’s Literature Research Association 10th Annual Conference (2024年11月23日)にて研究発表。

会員による出版紹介(会員氏名ABC順)

◇足達 賀代子 氏

“Spenser in Japan: Reception, Translation, and Research Development,” *Spenser Studies: A Renaissance Poetry Annual* 38, pp. 147–175. (共著)

◇別府 恵子 氏

“The Echoing Pan-Pacific –Henry James, _Cid Corman, Lindley Williams Hubbell, and Gary Schneider ” (45, Fall 2024) pp. 224–246.

◇小杉 世 氏

「クリスマス島での英米核実験をめぐる記憶——キリバス人の被ばくの「語り」による再構築」(風間計博・丹羽典生編『記憶と歴史の人類学——東南アジア・オセアニア島嶼部における戦争・移住・他者接触の経験』風響社 2024年3月刊) pp. 327–349.

「パフォーミング・アーツ (ニュージーランド)」
「現代文学 (島嶼部)」(オセアニア文化事典編集委員会編『オセアニア文化事典』丸善出版 2024年10月刊) pp. 472–473, 490–491.

第3章「太平洋核実験をめぐる当事者性——キリバス共和国クリスマス島の英米核実験を中心に」第9章「帝国のホモ・サケル——太平洋核実験をめぐる当事者性と芸術の想像力」(中原聖乃・三田貴・黒崎岳大編『核問題の「当事者性」——時間と場所を超えた問いかけ』泉町書房 2024年12月刊) pp. 52–70, 158–175.

◇奥本 京子 氏

『共生社会の大学教育: コミュニケーション実践力の育成に向けて』(共著、東信堂、2024年3月刊) pp. 97–120

『ファシリテーションが創る大学: 教職員と学生の協働による学習コミュニティ』(共編著、明石書店、2024年9月刊) pp. 69–102

◇瀬戸 智子 氏

『女子プロレスの誕生—冷戦期日本の大衆文化とインターセクショナリティ』(単著、春風社、2025年2月刊)

◇山崎 幸治 氏

“The Scars of the Eelam War: Eroded Trust in North-Eastern Sri Lanka,” in Guang Yang, Jing Zhang, Lanyu Liu, and Xinghan Xiong (eds.), *Countries and Regions: Dynamic Interconnectivity*, Area Studies Book Series, Tsinghua University, Palgrave Macmillan, (2024), (共著) pp. 219–252.

“Educational Consequences of Firsthand Exposure to Armed Conflict: The Case of the Sri Lankan Civil War,” *World Development*, Volume 173, (January 2024), 106430. (共著)

英文学科卒業論文・プロジェクトコンテスト

2008年から卒業論文および卒業プロジェクトのコンテストを開始し、今年度も13名の応募を受けつけた。2月に英米文学文化、言語コミュニケーション、応用言語学(通訳・翻訳分野)、グローバル・スタディーズの各部門で選考を行い、最優秀賞受賞者、優秀賞受賞者を以下の通り決定した。

英米文学文化(応募者5名)

<最優秀賞>

E21049 ルビアント クリスティ

E21019 伊藤 美結

<優秀賞>

E21032 松葉 優

言語コミュニケーション(応募者3名)

<最優秀賞>

E21068 田中 礼依

<優秀賞>

E21065 高野 知香

応用言語学(通訳・翻訳分野)(応募者3名)

<最優秀賞>

E19074 益谷 憩

<優秀賞>

E21010 畑 里奈

E21042 西川 詩桜

グローバル・スタディーズ(応募者2名)

<最優秀賞>

該当者なし

<優秀賞>

E21090 安井 小晴

記念賞

2024年度、以下の学生に対して、次の学内記念賞が授与された。

タルカット 記念賞 E3年生 久谷 伶

デフォレスト 記念賞 E3年生 町野 さくら

キャンパスニュース

<着任>

山内 理恵 教授 2025年4月

神戸女学院大学英語英文学会 会則

(1995年 4月 1日施行)

(2005年 9月22日改訂)

(2010年 3月 2日改訂)

(1) 名称

本学会を神戸女学院大学英語英文学会と称する。

(2) 目的

本学会は本学英文学科卒業生および大学院英文学専攻修士の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。

(3) 構成

本学英文学科卒業生、大学院英文学専攻修士有志および本学英文学科教員、元英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。

(4) 活動

年一回、英語英文学会大会を開催する。

Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英語英文学会その他の活動の内容を報告する。その他。

(5) (a) 上記の活動運営のために運営委員会をおく。

(b) 運営委員会は、本学英文学科長と、本学英文学科教員若干名で構成されるものとする。

(c) 会費の取り扱いは学科会計委員が担当する。

附 則

この規定は、2022年4月1日から施行する。(2022年1月14日改正)

内規

I. 大会での発表について

(1) 発表希望者は毎年7月1日までに、発表論文の簡単なレジュメと略歴を添えて、英文学科事務室まで申し込み、英文学科教授会で審議の上、決定する。

II. 参加費・経費について

- (1) 神戸女学院在職者、在学生を除き学会参加者は参加費500円を学会当日に納入する。遠隔による開催の場合はこの限りではない。
- (2) 郵送費などの経費は、英文学科予算から支出する。
- (3) 参加費の徴収、及び郵送費などの経費の支出は、学科の会計委員と文学部事務室(英文学科)が担当する。

附 則

この内規は、2022年4月1日から施行する。(2022年1月14日改正)



編 集 後 記

KCSES学会員の皆様から、研究活動報告・出版物のご連絡を頂き感謝申し上げます。今年度の学会もオンラインでの開催となりましたが、たくさんの学会員の方々に参加していただき、人文学研究の可能性について考えることが出来る有意義な時間となりました。

なお、厚かましいお願いで誠に恐縮ではございますが、神戸女学院教育振興会にご寄付を頂きます際には、学生たちの研究活動の補助に用いさせていただきたく、「国際学部 of 学生の為に」と一言お書き添え頂ければ幸いです。

皆さまのご健康と益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

KCSES Newsletter 編集委員

(2024年度運営委員)

(ABC順)

○古東 佐知子

○瀬戸 智子

○白井 由美子

○和氣 節子

KCSES Newsletter No. 40

編集発行 神戸女学院大学英語英文学会

〒662-8505 西宮市岡田山4-1

Tel (0798) 51-8548 Fax (0798) 51-8532

2025年3月発行